イエスの世代かマタイの世代か

──「この世代」（マタイ23,36）をめぐって ──*

須　藤　伊知郎

I

紀元後70年のエルサレム神殿崩壊はマタイ福音書に大きな影を投げ掛けている。この民族の破局のおそらくわずか十数年後に福音書を執筆している著者にとって、その原因がどこにあるのか、誰にその責任があるのかが非常に大きな関心であった。彼は王子の婚礼の譬において22,6f. でQ 14,19−21を編集し、エルサレム破壊をはっきりと暗示する言葉を挿入している。マタイはその原因を王＝神の怒りに帰し、その責任は王が派遣した僕たち＝預言者たちを虐待し、殺した「かの人殺しども」（τοὺς φονεῖς ἐκείνους）にあると指摘している。この預言者迫害のモティーフ[1]を、マタイは直前に置いた葡萄園の悪しき農夫たちの譬で、手本のマルコから引き継ぎ（マタ21,35f. 並行マコ12,3−5）、それを次の王子の婚礼の譬にも盛り込んだのである。

このエルサレム神殿崩壊と預言者迫害のテーマは、23,29から24,2にかけて再び集中して出て来る。23,34−36では預言者迫害について語られた後に「お前たちの上に…あらゆる義しい血が到来する」（35節）「これら一切はこ

---

*本稿は2004年9月13日に富坂キリスト教センターで行われた日本聖書学研究所例会での口頭発表の、主として前半の釈義部分を改稿したものである。

1　預言者迫害のモティーフに関してはO. H. Steck, Israel und das gewaltsame Geschick der Propheten. Untersuchungen zur Überlieferung des deuteronomistischen Geschichtsbildes im Alten Testament, Spätjudentum und Urchristentum (WMANT 23), Neukirchen-Vluyn 1967 を参照。

の世代の上にやって来るであろう」(36節) という決定的な宣言が、事後予言の形でイエスによって下される。そしてさらに27,25ではピラトの尋問場面で「民全体」が、23,35f. に呼応する言葉遣いで、「彼のその血は我らと我らの子らの上に」と誓う。

これら一連の箇所から福音書の読者に提示されるのは、預言者たちの迫害とその頂点としてのイエス殺害の責任が、「お前たち」「この世代」「我らと我らの子ら」(23,35.36；27,25) の上に及ぶ、ということである。23,36の「この世代」(τὴν γενεὰν ταύτην) とは一体どの世代を指しているのであろうか。以下、本稿では23,34−36の釈義を通して36節の「この世代」がイエスの同世代を指しているのか、福音書記者マタイの同世代を指しているのか、それとも重層的にその両者を指しているのか、その意味の射程を探ってみたい。その際、特に23,36と27,25の関係が問題となるであろう。

Ⅱ

まずマタイ23,34−36 (並行ルカ11,49−51) の試訳を示せば、以下の通りである。

「[34]このゆえに
見よ〔他ならぬこの〕私がお前たちに向けて預言者たち
と賢者たちと律法学者たちを〔次々に〕派遣する。
彼らのうちの幾人かをお前たちは殺し、そして十字架につけ、
そして彼らのうちの幾人かをお前たちの諸会堂でむち打ち、
そして町から町へと迫害するであろう。
[35]それはお前たちの上に、
義人アベルの血から
お前たちが神殿と祭壇の間で殺害した
バラキオスの子ゼカリヤの血に至るまで、
地上で〔繰り返し〕流されている、

あらゆる義しい血が到来するためである
[36]アーメン汝らに告ぐ、
これら一切はこの世代の上にやって来るであろう。」

マタイによるこの箇所の前後の文脈構成を見ると、次の通りである。マタイはマルコ12,38−40を手掛かりにしてこれを拡大させた23,1−12の次にQの七つの禍いの言葉を挿入し（マタ23,13−36）、その後に同じくQだが別の位置にあったエルサレム遺棄預言をつなげ（23,37−39）、マルコの寡婦の賽銭の段落（マコ12,41−44）を削除して、神殿崩壊預言（マタ24,1f.並行マコ13,1f.）に直結させた。その結果23,29−24,2にかけて、預言者迫害と神殿崩壊のテーマで緊密な構成が出来上がっている。以下23,34−36を節を追ってQ（およびルカ）との対比で分析し、マタイの編集作業とそれによって初読者に与えられていた読解の可能性について考察する。

34節：

Q（並行ルカ11,49）で「神の知恵」（ἡ σοφία τοῦ θεοῦ）が３人称の主語であったのを、マタイは１人称（ἐγώ）でイエス自身を主語に変え、「彼らの中に」（Q＝ルカ：εἰς αὐτούς）を「お前たちに向けて」（πρὸς ὑμᾶς）に変えている。「神の知恵」は神名の言い換えないし、神の属性としての知恵が人格化して表現されているとすると、Qヴァージョンでは派遣される者たちは旧約の預言者たちであったのだが、マタイ版ではイエスによって派遣されるイスラエル伝道を行うキリスト教伝道者と読み取る可能性も与えられる。１人称のἐγώを預言者イエスが神の言葉を語る神の「私」と取れば、マタイ版でもQと変わらず、主語は実質的に神であるということになる。しかし山上の説教のἐγὼ δὲ λέγω ὑμῖν「しかし我汝らに告ぐ」を聞いて来た読者の耳には、この「私」はイエス自身を指すものと受け取られる可能性が高い。マタイ版で派遣される三種類の者たちのうち「預言者たち」と「律法学者たち」はマタイ共同体にもいたことが分かる[2]。これらの目的語も読

2 「預言者」について7,22；「律法学者」について13,52参照。マタイの共同体にお

者が派遣する「私」をイエス自身と読む可能性を高める。

Q（そしてルカ）では「神の知恵」が語っている３人称の「彼ら」に対する語り掛け（49−51節前半）とその２人称「お前たち」への適用（51節後半）の間で語りの位相に落差があるが、マタイでは１人称の２人称に対する呼び掛けで一貫している。この結果、物語の表層ではイエスが彼の同世代に語り掛けている場面であるが、その語り掛けは全体が同時に直接読者にも響いて来るものとなる。

34節後半でマタイがQを敷衍している「お前たちの諸会堂でむち打ち」および「町から町へと迫害する」は、それぞれ弟子派遣説教の10,17「彼らは彼らの会堂であなた方を鞭打つであろう」；10,23「人々があなた方をこの町で迫害する時は、ほかの町へ逃げよ」に対応している。10章の文脈ではこれらの言葉はイエスが派遣する弟子たちの被る苦難を語っているが、弟子たちに自己を同一化させて読む読者にとって、それらは同時に現在イスラエル伝道者の被る苦難を語っていることになる。10章の派遣説教に照らして23章を読む者には34節後半で語られる苦難は、生前のイエスが遣わす弟子たちの苦難であると同時に、復活の主が使わすイスラエル伝道者が現在被っている苦難でもある。「十字架につけるであろう」も明らかにマタイの編集である[3]。イスラエル伝道者がローマの刑罰を受けるのは奇妙だが、おそらく10,17f.に描写されているような、ユダヤ人会堂からローマ当局に引き渡される事態が考えられているのであろう。

35節：

35節でマタイはQの「血が要求される」（ἐκζητηθῇ τὸ αἷμα）を27,25を念頭に置きつつ「お前たちの上に血が到来する」（ἔλθῃ ἐφ᾽ ὑμᾶς …

ける「賢者たち」の位置付けは不明である。これはマタイの編集としては説明がつかない。おそらくQが「預言者たちと賢者たち」となっていたのであろう。ルカ版の「使徒たち」は明らかにルカの編集である。あるいは、ひょっとするとマタイはQから削除した「神の知恵」（ἡ σοφία τοῦ θεοῦ）という言葉を、「賢者たち」（σοφούς）という形で再利用したのかもしれない。

3　動詞「十字架につける」（σταυροῦν）はQには見られない。名詞（σταυρός）はマタ 10,38 並行ルカ 14,27 に一箇所だけある。

αἷμα）と変更する。さらに「義しい」血、「義人」アベルとマタイにとって重要な δίκαιος の語を書き加える。こうすることで、預言者ではないアベルとゼカリヤの座りがよくなる[4]。また少し前の23,29でも Q の「預言者たち」に「義人たち」を書き添えることで預言者と義人が同列に並べられて、この文脈全体の一貫性を高めている[5]。「血」を修飾する分詞句もマタイは Q を細かく修正する。Q の完了分詞は預言者たちの血が旧約時代に世の開闢以来流されてしまった結果、物語のイエスが「神の知恵」を代表して語っている現在にその災いの陰が及んでいることを示している（Q 11,50：ἐκκεχυμένον ἀπὸ καταβολῆς κόσμου）。マタイはこれを現在分詞にしてその反復性を強調する（マタ23,35：ἐκχυννόμενον ἐπὶ τῆς γῆς）。πᾶν αἷμα「あらゆる血」という言い方で多様性を表現し、現在分詞と合わせて流血の夥しさが強調される。「世の開闢以来」を「地上で」に変更しているのはおそらく創世記4,10−12に 4 回出て来る「地」を意識したものであろう。流された血は「地」から神に叫んでいるのである。

マタイは「義人アベル」と並行法で言葉数がつり合うようにゼカリヤに「バラキオスの子」を添える。バラキオスの子ゼカリヤは記述預言者ゼカリヤであるが、このゼカリヤが横死を遂げたという記述はヘブライ語聖書にはない。おそらく歴代誌下24,20−22のヨアシュ王に殺された祭司イェホヤダの子ゼカリヤが念頭に置かれている。66年に神殿でゼーロータイに殺害された、ヨセフス『ユダヤ戦記』4,334−344に出て来るバレイス（ないしバルク、バリスカイオス）の子ゼカリヤと同定する試みもあるが説得的ではない[6]。そうだとするとアベルとゼカリヤの事件は、ヘブライ語聖書の最初の殺人と最後の殺人ということになる[7]。「殺害した」（ἐφονεύσατε）はマタ22,7「殺人者たち」（φονεῖς）と対応しているので、マタイの編集であろう。エルサ

4　アベルが「義人であること」についてはヘブ 11,4 参照。

5　27,19 のピラトの妻の警告でイエスが「義人」とされていることをも参照。

6　U. Luz, Das Evangelium nach Matthäus. Teilbd.3. Mt 18,1−25,46 (EKK I/3), Zürich/Düsseldorf/Neukirchen−Vluyn 1997, 373, Anm.40 参照：1．父親の名前はやはり合っていない、2．このゼカリヤは祭司ではないので祭司の庭で殺されたわけではない。

7　H. G. L. Peels, The Blood ‘From Abel to Zechariah’ (Matthew 23,35 ; Luke 11,50f.) and the Canon of the Old Testament, ZAW 113 (2001) 583−601 はこの解釈に反対し、

レム破壊を暗示する22,7を読者に想起させ、流血によって生じた呪いが70年に災いの出来事となって民に襲いかかったことを示唆するものである。

36節：

「アーメン汝らに告ぐ」はマタイが特に好む導入定式である[8]。マタイは「これら一切」を付加して、ふたたび多様性と夥しさを強調している。

「この世代の上にやって来るであろう」（ἥξει ... ἐπὶ τὴν γενεὰν ταύτην）は35節冒頭の「お前たちの上に血が到来する」（ἔλθῃ ἐφ᾽ ὑμᾶς ... αἷμα）と同様に27,25を念頭に置いたものである。ただし、35節の「お前たち」が文脈からは「禍いだ、お前たち律法学者とファリサイ人よ」とイエスに呼び掛けられているユダヤ教指導者層であるのに対して、36節の「この世代」は明らかにより広く、物語の表層ではイエスの同世代を指している。

付論　マタイ福音書における γενεά

ここでマタイ福音書における γενεά の用例を概観してみよう。γενεά は新約全体で43回出て来るうち、13回はマタイの用例であり、使用頻度は突出している。以下順に見ていくと、

まず1,17（マタイ特殊資料）のイエスの系図のまとめに4回複数形が出て来るが、これは時間の経過を数える単位としての世代であって、我々の箇所のように負の価値判断を含まないものである。

次に11,16（Q）では市場の子どもたちの譬で「この世代を何に譬えようか」と、聴衆である群衆に向って語り掛けられる。「この世代」は、文脈から明らかなように「バプテスマのヨハネの日々から今に至るまで」（11,12）を生きているイエスの同世代であり、それがこの譬によってヨハネとイエスの宣教を拒絶する者たちとして負に評価されている。

それから集中して γενεά が出て来るのが12,39−45である。「律法学者たちとファリ

正典の順序はマタイ執筆の時点ではまだ決まっておらず、この二人はその共通性で挙げられたのだと主張する。すなわち、無実の者が暴力的に殺され、この殺人はその者の神への献身とつながりがあり、報復を求める叫びが天に聞こえた（創4,10；代下24,22）、のは旧約にこの二人の箇所しかない。しかし私見によれば、流された血＝暴力的殺害を包括的に述べているQの伝承の意図からして、やはりヘブライ語聖書の最初と最後の殺人として名前が挙げられている蓋然性が高い。

8　5,18；6,2.5.16；8,10；10,15.23.42；11,11；13,17；16,28；17,20；18,3.13.18.［19］；19,23.28；21,21.31；23,36；24,2.34.47；25,12.40.45；26,13.21。

サイ人たちの幾人か」が徴を求めたのに対して、12,39；16,4（マルコ／Q）で「邪悪で、不貞な世代（Γενεὰ πονηρὰ καὶ μοιχαλίς）は徴をしつこく求める」とイエスが答える。マルコ版では「この世代」（マコ8,12：ἡ γενεὰ αὕτη）となっているのに対して、Q 11,29では「邪悪な世代」（γενεὰ πονηρά）と負の評価が入り、さらにマタイはこれを「邪悪で、不貞な世代」と形容する。続く12,41f.（並行Q 11,31f. ただし逆順）では「ニネベの人々／南の女王が、裁きの際、この世代と共に甦り／起こされ、この世代を罪に定めるであろう」という審判の言葉が語られる。「ニネベの人々／南の女王」との対比は、審判の対象がイスラエルであることを示唆する。次の戻って来る悪霊についての段落の末尾12,45では、Q 11,26にマタイによる編集で「この邪悪な世代も、このようになるであろう」と付加がなされている。12,38からここまで２人称複数で呼び掛けられている聴衆は、まず第一には徴を要求する「律法学者たちとファリサイ人たちの幾人か」であるが、直後の12,46の「彼がまだ群衆に語っているうちに」という枠付けからも明らかになる通り、12,15以降、群衆がその場に居て論争を聞いているという講図になっている。したがって、「この世代」という表現で審判を宣告されているのは、イエスの同世代のイスラエル総体ということになる。

17,17（並行マコ9,19）では、イエスが山上の変貌の後下山して群衆のところにやってきた、という場面設定の悪霊に憑かれた子の癒しの段落で、「ああ、信仰のない、曲がった世代よ（Ὦ γενεὰ ἄπιστος καὶ διεστραμμένη）、一体いつまで私はあなた方と共にいるであろうか」と言ったと記される。マルコの「信仰のない世代」という表現にマタイはさらに（独立して、あるいはルカ9,41と共通する口頭伝承から、おそらく申32,5に触発されて[9]）「曲がった」という形容を付加している。さらにマルコの「あなた方の許に」（πρὸς ὑμᾶς）をマタイは「あなた方と共に」（μεθ᾽ ὑμῶν）と書き換え、福音書を貫くインマヌエルのテーマに引き寄せている。

23,36の後、マタイで γενεά が出て来る最後の箇所が24,34（並行マコ13,30）である。弟子たちに向って語られる終末の講話の中で、「これら全てのことが起こるまでは、この世代は過ぎ行くことがない」と言われる。マタイは「この世代」を、後続する24,37−39にQ 17,26−30のノアの時代に関する言葉を続けることによって、洪水世代に比すべきものと解釈している。読者はここで、創世記7,1の「この世代（において）」（בַּדּוֹר הַזֶּה/ἐν τῇ γενεᾷ ταύτῃ）という言葉を想起させられる。

マタイにおける γενεά の用例は、1,17を除いてすべてイエスの口に置かれており、物語の表層ではこれはイエスの同世代を指している。マタイの編集作業によって読者は「この世代」をヘブライ語聖書の洪水世代הַדּוֹר הַזֶּה（創世記7,1）、荒野の世代 דּוֹר עִקֵּשׁ וּפִתַּלְתֹּל「ひねくれ、ねじけた世代」

9　申 32,5「ひねくれ、ねじけた世代」（דּוֹר עִקֵּשׁ וּפִתַּלְתֹּל/γενεὰ σκολιὰ καὶ διεστραμμένη）。
さらに申 32,20 をも参照：「つむじの曲がった世代」（דּוֹר הַפְּכֻכֹת/γενεὰ ἐξεστραμμένη）。

דּוֹר תַּהְפֻּכֹת「つむじの曲がった世代」（申命記32,5.20）以来の負の評価を伴うものとして連想し、罰を受けるべき堕落した世代と理解するであろう。イエスに2人称で直接語り掛けられて、読者は意に反して物語の中の「この世代」に参入することとなる[10]。これは福音書の読者に一つの大きな緊張を強いる。他方マタイの構成によって「この世代」の上に降り掛かった災いは、70年のエルサレム神殿破壊であることが強く示唆されている。そうだとすれば、読者には自分自身を「この世代」とは別の次の世代に属す者と了解する可能性も与えられていることになる。そこで、23,36の「この世代」に読者の世代が含まれるかどうかを判断するためには、それに対応する27,25の「彼のその血は我らと我らの子らの上に〔到来すべし〕」という一句をこの観点で吟味する必要がある[11]。

Ⅲ

マタイ27,24f.の試訳を示せば、以下の通りである。

「[24]一方ピラトは何も効果がなく、それどころか騒擾が生じつつあるのを見たので、水を取ってその群集の面前で両手を洗って曰く、『私はこの血に〔手を染めず〕責任がない。お前たちで何とかせよ』。[25]そこでその民全体が答えて言った、『彼のその血は我らと我らの子らの上に〔到来すべし〕』。」

この明らかにマルコ15,15の手本にマタイが書き加えた編集句によれば、騒擾が発生しかけて、ピラトは群集にイエスの無罪性を説得することを諦め

10　マタイ福音書における読者の参入に関してはJ. K. Brown, Direct Engagement of the Reader in Matthew's Discourses : Rhetorical Techniques and Scholarly Consensus, NTS 51 (2005) 19−35を参照。

11　この一句についてはすでに拙論「民族性と救い ― マタイ21,43の釈義 ―」『西南学院大学神学論集』第56巻第1号（1998）1−33.31f.（『日本の聖書学』第6号（2001）96−130.118f.に改稿の上再録）でも触れ、„Blut und Schuld in Mt 27,19f.24f.“『西南学院大学神学論集』第57巻第1号（1999）1−15.5ff.で論じたので、詳しくはそれらを参照されたい。

る。妻の「その義人とは関わらないように」との警告があったにもかかわらず（27,19)、彼は無実の者を刑に処すことを決断した。ピラトはユダヤ教の慣習に従って手を洗い、自らは責任がないと宣言する。この祭儀的な象徴行動は、犯人不詳の殺人の血を宥める方法を定めている申命記21,6−9に遡る。本来は民の長老たちによって遂行されるべきこの手洗いの象徴行動を通じて、彼らによって代表された民の無実性が確証されるのであるが、ここではそれを異邦人ピラトが勝手に行ってイスラエルの民に罪を着せるという極めてグロテスクな情景が描かれている。

このピラトの責任転嫁の宣言に対して「民全体（πᾶς ὁ λαός）が答えて言った」とマタイは記す。そこまで「群衆」(20節：τοὺς ὄχλους；24節：τοῦ ὄχλου）と言われていたものが、ここへ来て唐突に「民全体」に転換する。物理的には無論、この尋問場面でピラトの前にイスラエルの民が全員集合することなど不可能である。しかし、マタイの神学的な構想からすると、ここで発される一句はイスラエルの民全体の運命に関わる重大なものであり、単なる群衆ではなく民全体によって言われる必要があるのである。

「彼の血は我らと我らの子らの上に」という宣言は、ヘブライ語聖書の「彼の血は彼の上に」（דָּמוֹ בוֹ）という定式に遡る[12]。それは、祭儀共同体としてのイスラエルが犯罪者を処刑する際に、その血の呪いを被らないで済むように唱えたものである。この定式が自分自身に向けられると自己呪詛となり、もし処刑される者が無罪であるならば、という条件付きで語られると、自らが潔白であることを誓う言葉となる。そこで27,25をこの条件付きの自己呪詛で潔白の誓いを立てるものとして敷衍すれば、「〔イエスの血は彼の上に降り掛かれ。しかしもし万が一彼が無罪であるならば、〕彼のその血は我らと我らの子らの上に」という意味になる[13]。

イスラエルの民全体は、祭司長たちと長老たちの陰謀で、彼らに説き伏せられ（27,20)、この潔白の誓いによってイエス処刑の責任を自らそれとは知

12　この定式に関してはK. Koch, Der Spruch „Sein Blut bleibe auf seinem Haupt“ und die israelitische Auffassung vom vergossenen Blut, VT 12 (1962) 396−416を参照。

13　この解釈についてはG. Theissen, Aporien im Umgang mit den Antijudaismen des Neuen Textaments, in : E. Blum u. a. (Hg.), Die Hebräische Bibel und zweifache Nach-

らずに背負わされた。その結果、イエスの血の呪いは民全体に及ぶこととなったのである。

Ⅳ

以上を踏まえた上で最後にマタイ23,36と27,25の関係を考えてみよう。まず物語の表層を見てみると、マタイ23,36では、「この世代」＝イエスの同世代の上にアベルからゼカリヤまで「あらゆる義しい血」が到来する、と語られていた。それに対してマタイ27,25では「我らと我らの子らの上に」イエスの血が降り掛かる、という。その血の持つ呪いの力が災いとして現実化したのが70年の神殿破壊の出来事である。それは福音書が描くイエスの物語の時点から約40年後のことであった。一世代を30年と考えるならば、27,25の言葉を「我らの上に」だけとしたのでは、計算が合わなくなる。「我らと我らの子らの上に」つまり、イエスの同世代と次の世代に70年の破局は臨んだのである。

呪いの場は、それが災いとなって出来事となると消滅する。そうだとすれば、マタイは70年の出来事で、イエスを殺害したことによって生じた呪いの場は消えたと考えている可能性が高い[14]。この点でユダヤ民族はイエスの血の故に未来永劫呪われているのだとする解釈は全く的外れである[15]。マタイが保持している終末待望から見ても、今後何世代にもわたってイスラエルが呪いの場に留まり続けるという発想は生じて来ないであろう。イスラエルは偽りの指導者たちに惑わされてイエスを拒絶してしまったけれども、その罪はエルサレム神殿の破壊によって帳消しにされ、今一度改めて福音宣教の呼

---

geschichte. FS R. Rendtorff, Neukirchen-Vluyn 1990, 535−553.538 ; J. Roloff, Die Kirche im Neuen Testament (GNT 10), Göttingen 1993, 150 を参照。ロロフはこう記している、「それ〔民〕ははっきりと、神がイエスの血を、もしそれが仮に無実で流された血である場合には、その刑罰によって責任者たちとその子孫に要求するであろう、と認める」（強調はロロフ）。

14　K. Berger, Theologiegeschichte des Urchristentums, Tübingen[2] 1995, 733 を参照。「マタ 27,25 によればユダヤの民衆が自らに引き寄せた罪はエルサレムの破壊によって顕わとなると同時にまた償われる（マタ 23,34−39）」。

び掛けを聞いて立ち帰る可能性が与えられている[16]。

他方、物語の表層を通してその奥にマタイ共同体が置かれている現在が透けて見えているという観点で考えると、もう一つ別の面から福音書記者のメッセージが読み取れる。マタイ23,36の「この世代」は、2人称の語り掛けを自分たち自身へのものとも聞く読者にとって、かつてのイエスの同世代だけでなく、マタイ共同体が生きている現在の世代をも指すものと受け止められる可能性があった。それは復活のイエスが派遣するイスラエル伝道を行っている者たちを迫害している「彼らの会堂」(10,17)、すなわちマタイ

15　K. Haacker, »Sein Blut über uns« Erwägungen zu Matthäus 27,25, Kirche und Israel 1 (1986)　47−50.48 を参照。ヘブライ語聖書の裁判故殺（既遂であれ未遂であれ）の物語では、犯人とその家族が一世代のうちに横死を被ることが義しい贖罪と見なされている。1）ナボテの裁判故殺では、アハブの家に対する審判の言葉（王上 21,21）が、アハブ、妻イゼベル、息子たちの死で実現している（王上 22；王下 1 章、9 章）。2）エステル記で、ハマンはモルデカイを処刑しようとするが、モルデカイのために用意した木に架けられ、彼の十人の息子たちも木に架けられる（エス 7,10；9,6−14；8,12　LXX）。3）ダニエル書で、ダニエルの告発者たちは彼がライオンの穴で助かった後に妻子もろともライオンの穴に投げ込まれて咬み砕かれる（ダニ 6,25）。なお、裁判故殺のための贖罪に子どもたちを巻き込むのは物語テクストだけに例証があり、トーラーには対応しない（Haacker,　ebd.）。申命記 24,16、さらに罪責個人主義の考えを記しているエレ 31,29f.；エゼ 18,2.4.17.20；王下 14,6 参照。

16　ラビのユダヤ教およびユダヤ人キリスト教における神殿破壊の解釈については H.-M. Döpp, Die Deutung der Zerstörung Jerusalems und des Zweiten Tempels im Jahre 70 in den ersten drei Jahrhunderten n. Chr., Tübingen/Basel 1998 を参照。エルサレムと神殿の破壊は必ずしもイスラエルの廃棄を意味しない。重要な典拠を 3 つだけ挙げれば以下の通りである。1）bGittin 57b//bSanh 96b//jTaan 4,69a,56（Bill I, 940f. zu Mt　23,35）によれば、第一神殿破壊の際のネブザラダンによる大量の流血で、ゼカリヤの血はなだめられた。2）第五エズラ 1−2 章で、第二神殿破壊は神の罰として描かれている。「母とその子らの比喩に第 5 エズラのユダヤ人キリスト教の神学が反映している。それによれば背信の世代への罰の後に、神がイスラエルに期待し、預言者たちによって要求されていたように、ふたたび神の掟を守るユダヤ人キリスト教のイスラエルが成立する。」（Döpp 35）。3）レビの遺訓 16,4f.：「あなたの聖所は彼〔イエス〕のゆえに荒廃して更地となるであろう。…あなたは異邦人の間で呪いとなり離散するであろう、彼が再びあなたを訪れ、憐れみをもって受け入れるであろう時まで。」預言者たちと（名前は挙げられていないが明らかに）イエスの殺害のゆえに、神殿は破壊される。しかし、将来神が再び憐れみをもってイスラエルを訪れることが待望されている。マタ 23,39 参照。なお、マタ 23,39 は私見によれば、メシアの宴を共に祝う喜ばしい訪れ（マタ 26,29）と並行する、救いをもたらす再臨であって、裁きをもたらす再臨ではない。

の共同体が対峙しているユダヤ人会堂に代表されるイスラエルの現世代である。福音書の読者はイエスの「この世代」に対する厳しい審判の言葉に、物語の中のイエスの同世代のみでなく、自分たちの同世代への批判も読み取ったであろう。27,25の「我らと我らの子ら」も、同様にマタイ共同体の同世代にも当てはまるものと読まれた可能性がある。すなわち、マタイ共同体の宣教者たちを迫害する者たちは、かつてイエスに対して犯したのと同じ過ちを繰り返すことになる、ということである。物語の中に参入した読者は、イエスの審判の言葉を突き付けられ、「この世代」に属す者たちのように振る舞わないように促される。この教育的・訓戒的な機能が「この世代」という言葉に込められている、物語の表層とは異なるもう一つ別の位相である。

V

まとめると、23,34−36の釈義の結果、36節の「この世代」は物語の表層ではイエスの同世代を指しているが、2人称の語り掛けによって読者が物語の中に参入すると、マタイの同世代を指すものと理解する可能性も与えられていることが判明した。27,25の言葉は条件付きの自己呪詛が、潔白の誓いとして宣言されているもので、イエスの血の呪いが民全体に及ぶこととなったとするマタイの解釈を提示している。この27,25との関係を考察すると、23,36の「この世代」は重層的にイエスの同世代と福音書記者マタイの同世代の両者を指していることが明らかになった。それは一方でマタイによるエルサレム神殿崩壊という民族の破局の神学的解釈であると同時に、他方でマタイ共同体の現在に対する訓戒的な機能を果たしている。